

ADULT  
ONLY  
**R18**  
成人向

ナチスの褐色女将校が  
げるまんスーパーアリーナで  
試作型サメ人間との  
寝取られごっこにハマる回



ナチスの褐色女将校が  
げるまんスーパーアリーナで  
試作型サメ人間との寝取られごっこにハマる回

文:名無しの東北県人  
イラスト:23/黒ノ樹

ウツテンカイ

一九四五年八月十七日。

「んっ……ああ……んんっ……♡」

二つの影がベッドの上で、淫らな水音を立てつつ交わっている。

ここはハンガリー西部にあるバラトンフェルド——ドイツ軍制圧下に置かれた  
今は無理矢理『鮫林寺』（シャリンジ）と改称されている、バラトン湖西岸の都市——に建つ  
『ドイツイツあげるまんスーパーアリーナ』内の一室。

「愛しています、イルザ様」

背面即位で部屋の主たるイルザ・ヴァレンシュタインに激しく熱塊を打ち込む  
プロトサメ人間は、汗ばんだ首を限界まで傾けてこちらの双眸を覗き込んでいる  
彼女の淫核を右手で愛撫する。

「誰よりもっ……貴方をつ……！」

「私もおっ……プロトおっ……んっ」

熱い息に乗せて喉奥からの響きを漏らし合う二人は、とうの昔に口中着ている

武装親衛隊の軍服を全部脱ぎ去っていた。

「好き、好きいつ……！」

この褐色肌と茶色の長いポニーテール、そして金の瞳を持つイルザは先端技術研究部隊の長として今まで非人道的極まる人体実験を何千回と行い、それを基に多くの戦闘用生物や改造人間を送り出してきた。

「イルザ様……孕ませたいです」

たった今イルザを仰向けに寝かせ、白らの素直な胸の内を口にしたプロトサメ人間も当然その一体である。

「来てえん……っ」

イルザはプロトサメ人間の求めに、白らの秘部を指で左右に広げて応じた。

「満たします……イルザ様……」

「あっ——♡」

大きく開かれたイルザの股の間に自分の両膝を割り込ませたプロトサメ人間は、

成人男性のそれと何一つ変わらぬ上反りの先端で、蜜まみれの肉壁をゆっくりと押し広げていく。

「つつっ——♡」

付け根に右手を添えられた屹きつりつ立が根元まで全て呑み込まれるや否や、イルザは首輪の巻かれた喉を反らす。

「あ……あああ……っ！」

激しく蠢く肉壁ひだに陰茎全体を包まれたプロトサメ人間は、両手をイルザの腰に当てた上で前後を開始する。

「は……ああ、あ……っ」

ピストンに呼応して桃色の頂点部を持つ豊満が激しく揺れ、汗の滴が発達した彼女の腹筋や、既にあちこち染みだらけのシートに飛び散っていく。

「ああ……やつ……っ、ああああああああ……っ♡」

すぐに二人の結合部分は泡立って白くなり、嘔むせ返るような臭気が充満した、

薄暗い室内に響き渡る水音はその大きさを増していった。

「はあっ、ああっ——っふあああんっ♥ はあっ……プロトおん……♥」

「イルザ様……っ……自分……っ……もうっ……！」

それから程なくして限界点が近付き、それを悟ってより激しく打ち込んできたプロトサメ人間の胸にイルザの両足が絡められる。

これから自分が与えられるものを、一滴たりとも逃さぬように。

「あっ、ああ……ああああああっ♥」

イルザもまた、<sup>オーガズム</sup>快楽の頂に達しようとしていた。呼吸は荒くなり、口元からは涎が幾筋もだらしなく垂れている。

「はあっ——」

直後、プロトサメ人間の中を駆け抜けた熱がイルザの体内に飛び出した。

「ああああああああああああああっ♥」

「孕んでっ……！ イルザ……っ！」

「~~~~~っ♡」

染色体構造等の理由で、たった今イルザの中に解き放たれたプロトサメ人間の精子は受精に留まり、着床にまでは至らない。

だが受精はするのだ！

自分の精子がイルザの中で、卵細胞の中に入り込みはするのだ！

「……っ……こんなに出してん……っ♡」

絶頂の時、自分の中で熱い飛沫がこれでもかと弾けるのを強く感じたイルザは軽い痙攣を繰り返しながら、若干粘度を下げたコンデンスミルク調の濃い液体が子宮内で波打つ感覚にこの上ない多幸感を覚えた。

「まだ抜かないでん……」

大きく肩を上下させるプロトサメ人間がとことん濡れ切った生殖溝から茎根を引き抜こうとするのをイルザは制止する。

「プロトと一つのまま……」

そして両手を伸ばし、口を睨って顔を前に出す。

「んむっ……」

要望に応じて上体を倒し、プロトサメ人間はイルザとキスを交わす。

「ああ……んっ、んむ……うう……ゆっ」

二人はしばし舌を絡め合った後、どちらからともなく顔を離す。  
妖しげな光を湛えた橋が架けられ、間を置かずして消えた。



一九四五年八月十八日。

「ふう……」

げるまんスーパーアリーナの執務室で仕事に一区切りつけたプロトサメ人間は、椅子の背もたれに寄り掛かって大きく息を吐く。

今の彼は、後ろに背ビレを出すための穴が用意された専用の軍服を纏っていた。

「昨日の夜、頑張り過ぎましたん？」

数分後——彼は頬に冷たい感触を覚えて飛び起きる。

「し、失礼しました……」

涎の伝う口元を右手の甲で拭ったプロトサメ人間は、両足を組んで自分の机に腰掛けているイルザに詫びた。

「別に構わないですん」

こちらも今は軍服に身を包んでいるイルザは、氷の入ったグラスに口を付けてオレンジジュースを啜る。

「むしろプロトは働き過ぎですん。そんなに根を詰めなくても大丈夫ですん」

そうは参りません……とプロトサメ人間は言えなかった。

イルザは優秀な科学者ではあるが秀逸な指揮官ではなく、すぐ日の前の作業に没頭してその他全てが蔑ろになったことは一度や二度ではない。

それを何とかしているのがプロトサメ人間なのである。

「たまには、何かお返しをさせてくださいん」

「自分はイルザ様の下で働けるだけで幸せです。お返しなんてとんでもない」

プロトサメ人間は素直に話したが、イルザは納得いかぬ様子。

「プロトはいつもそれしか言わないですん。求めない人は、エッチしている時に『学んで』なんて言わないですん」

「い、いやそれは……」

何も飲んでいないのに噎せ返ったプロトサメ人間は言葉では否定したものの、心の中に求めているものがないと言ったら嘘になる。

「では——」

背筋を伸ばし、口を見てきたプロトサメ人間に対し、イルザは「はいん！」と元氣よく答えた。

「まず、私はイルザ様を心から愛しています。貴方と、どこまでも共に歩みたい」

「ふむふむん」

「それと同時に……貴方が他の男性に抱かれているのを……見ると……その……  
どうしようもなく……酷く興奮してしまうのです」

プロトサメ人間は重苦しい口調で告白したが、言われた側は「そっかーん」と  
顎に手を当てるのみ。

「じゃあ適当な捕虜を一人連れてきて、私がプロトの前でそいつを犯しますん。  
一通り終わったらそいつは殺しますん」

「イルザ様……」

プロトサメ人間は訴えるような視線をイルザに向ける。

「実際に他の男と交わってほしくはないので……その……非常に気持ちの悪い  
話なのですが、イルザ様が他の男に抱かれているのを見て興奮するのと同じ位、  
私はイルザ様は誰にも渡したくないのです」

「んー……なるほどん」

顎先に人差し指を乗せて斜め上を見たイルザは、四秒後に折衝案を提唱した。他人のフリをしたプロトサメ人間と自分が肉体関係を持つ——という。



午後八時。

業務を終えたプロトサメ人間は人気のないげるまんスーパーアリーナの片隅で、一人落ち着かぬ時間を過ごしていた。

「じゃあ、早速今晚からん！」

プロトサメ人間を赤の他人に見立てての性行為——より直接的に言うならば『寝取られごっこ』とでも表現するべきか——を快諾したイルザは、ここで待つよう彼に命じていた。

本当に『して』しまうのだ。

今から六時間もすれば、自分はイルザの今まで見たことのない一面を口にする  
ことになる。

それを考えただけでプロトサメ人間は期待と嫉妬が混じった感情で止気を失い  
そうになり、猛烈な勢いで股間に血液を集中させてしまった。

午後の業務もほとんど仕事になっていない。

「貴方がパブリト様ですん？」

聞き慣れた声で鼓膜を叩かれ、横を向く。

そこには、これまた見慣れたイルザ・ヴァレンシュタインの姿があった。

「イルザさ——」

反射的にそこまで言いかけて、プロトサメ人間は『今はパブリトなのだ！』と  
思い出す。

「ああ。今日は宜しく」

敬語を使わず話した刹那、凄まじい背徳感がプロトサメ人間を襲った。

普段なら決して許されぬことだ。

「じゃあ行きましょうん」

イルザは甘い音色と共にプロトサメ人間の腕に抱き付き、まだ諸々ぎこちない彼を引っ張るかのように歩き出す。

「今日はたっぷり可愛がってくださいん——パブリト様♥」

よろめきつつ自分も歩き出したプロトサメ人間は続くそれを聞いて、冗談でも何でもなく卒倒しそうになった。



先にシャワーを浴びたプロトサメ人間は今、裸にタオル一枚という出で立ちでイルザの白室のベッドに腰掛けています。

昨晚もイルザと情交を行った空間、そしてベッドだが、今日はいつものように

寝そべって彼女を待つ気分にはなれなかった。

とにかく、落ち着かない。

既にプロトサメ人間の芯柱は限界まで勃起し、白布にテントを構築している。

「あっ……」

ふと鼻歌が聞こえてきて、プロトサメ人間はシャワー室の方を見る。

モザイクガラス越しに窺える褐色肌など昨口は何とも思わなかったが、今日は複雑な感情を増幅させるに十分だった。

「お待たせしましたん」

湯気立ち昇るドアの向こうから、バスローブ姿のイルザが濡れた髪を拭きつつ現れる。ポニーテールは当然解かれ、流れるままになっていた。

「見せてえん」

強い後ろめたさを隠し切れないプロトサメ人間の視線が定まらぬ一方、確かな足取りでバスローブを脱ぎ捨てつつ歩を進めたイルザは彼の目の前で膝を折り、

躊躇なくタオルを取る。

「はあっ……すっごく大きいん……っ」

背筋立ったプロトサメ人間の凶器が直接空気に接触する。そそり立つ怒張は、僅かばかりのカーブを描いていた。

「イルザ様、あの……」

思わず糸を出してしまったプロトサメ人間に構わず、豊満の頂点部を鮮やかに彩らせているイルザは眼前の茎を啜え込む。

「ああっ……」

剛棒全体が暖かい感触に包まれ、プロトサメ人間は両太腿を微震させて悶える。「れろっ……んあっ……んちゅっ……はあっ、んっ……♥」

右手で付け根をしっかりと固定したイルザは、歯を食い縛って耐える。プロトサメ人間を緩んだ上目で見つめながら、時折左手で横髪を直しつつ頭部を前後させる。頭が動く度、淫らな水音が空気を震わせた。

「ん……えるっ、ふっ……はあっ……えおお……っ♡」

時間の経過と共に興奮の度合いを高めていくイルザは、引き続きフェラチオを行いながら自身の秘部に手を伸ばし、真新しい蜜で一層湿気立った場所を弄る。

ただ相手を昂らせるための意図的な音出しは、白らの興奮をも二倍、三倍へと引き上げていく。

「出……っ」

「っ——♡」

限界に達したプロトサメ人間は大きく喉を仰げ反らせ、自身を深く呑み込んだイルザの喉奥に激熱を放つ。生臭い迸りが幾度に渡り炸裂した。

「んあっ……」

栗の花臭い粘糸を残して頭を離したイルザは、大きく口を開けて内部の白濁をプロトサメ人間によく見せてから、これまたわざと大きな音を立てて飲み干す。

「いつもより……ずっと濃いですん……」

まだ唇に残る蛋白液の残滓を人差し指で舐め取ってから呑み込んだイルザは、「次は何をしてほしい？」と問う。

「次は……」

最初から全く被り切れていなかったパブリトの仮面が外れた。プロトサメ人間は言葉に詰まるが、イルザに『してもらいたいこと』は一つあった。

何度肉体を重ね合っても、自分からは決して頼めなかったことが。

「お願い……します……」

プロトサメ人間はベッドの上で四つん這いになると、尻尾を右に動かした上で尻を突き出した。

その中央には、放射線状に周囲の皮膚を縮めた不浄の穴がある。

「了解ですん♥」

プロトサメ人間が恥ずかしさのあまり枕に顔を埋める一方でイルザは快く応じ、すぐに体を前に出す。

「っ——♥」

イルザの指が尻肉を左右に押し広げると、プロトサメ人間は肛門が空気に直接触れる感触と、菊皺の一筋一筋が舌で撫でられる鮮烈を立て続けに味わった。

イルザが自分の汚らしい排泄器官を舐めている。

とんでもないことをしてしまった——プロトサメ人間は心の中でそう漏らす。ここにいるのは自分ではなくパブリトという人物なのだ。そう思わないと止気を失ってしまいそうだった。

だがそれはそれで、愛しい人物が自分以外の男の穴を喜んで舐めているという事実となって彼に襲い掛かる。

「イルザ……ッ……舐めろ……ッ！ もっと激しくっ……！」

自分でも一休何を言っているのか半分わかっていないプロトサメ人間の命令に

「はいん」と頷いたイルザは、たつぷりの唾液で藤壺をこれでもかと濡らし、

「はあっ……んん……ゆ……んっ……えっ……はん……んんっ♥」

ドから上、あるいは強烈な吸い付きを秒単位で次々に繰り返す。

「はあっ……」

少しして、イルザの口が肛門から離れた。

「——ッ」

半秒後、滴り落ちる程の唾液を潤滑油代わりにまぶされたイルザの右手中指がプロトサメ人間の中に根元まで入り込む。

挿入した側は喉奥から声にならぬ響きを漏らしたプトとサメ人間を嬉しそうに見ながら左手首の連続スナップと第二関節を動かしての前立腺刺激を立て続けに繰り返す。

「また大きくなってるん……」

「イルザ……ッ……アあっ……」

みるみるうちに再び勃起し始めた陰茎を左手で激しく扱きながらイルザは言う。

「パブリト様は本当に変態ですん」

イルザの手の中で、剛直は加速度的にその硬さを増していった。



「ああっ……」

それから一分後——プロトサメ人間はお互いの息遣いまで聞こえる対面座位でイルザと向き合う。

「パブリト様あっ……好きっ……♡」

イルザはプロトサメ人間と見つめ合いながら、何層にも粘液が重ね塗りされた欲棒を自分の中に迎え入れていく。

「あつ——あああああんっ♡」

全て入り切るなり仰け反ったイルザは、すぐに休勢を戻してプロトサメ人間の後頭部に両手を回し、相手の唇に白らのそれを押し付ける。

「ふうっ……んちゅ、パブリトお……ああっ♥」

豊かな双乳をプロトサメ人間の逞しい胸板に押し付けて撓ませているイルザは、彼の背中をベッドに着けるなり上下運動を始める。

「はあっ……はっ……あああああ——っ！」

両掌をプロトサメ人間の汗濡れた腹上に置くイルザは、すぐに加わった愛しい相手からの突き上げを受ける度に熱い雫を撒き散らし、甘い嬌声を響かせた。

「あんっ……はあっ……ふああん……やあ……はあっ……ああっ♥」

「ああっ……イルザ……いいぞっ……！」

プロトサメ人間はイルザの双乳を下から鷲掴みにしようとする。

だが、弾力ある肉は汗で容易く滑ってしまい捕獲を許されなかった。

「ああっ……んんっ、はあっ……あっ——あああんっ！」

諦めたプロトサメ人間はイルザの腰部に両手を伸ばして固定すると、より強く打ち込む。怒張への締めりは更に強くなり、彼女側の上下もまたそれに準じた。

「やつ……ああっ……あああああっ♥」

「好きだ、イルザ……好きだ」

所謂正常位での交わりに切り替えた後、イルザとシート上で汗ばんだ掌同士を強く握り合わせたプロトサメ人間は彼女の耳元で囁く。

「私もおっ……私も好きいっ……！」

「あのプロト何とかって奴と、どちらが好きだ……？」

そして、少しだがこの状況に慣れてきたことで、プロトサメ人間は踏み出した言葉を口にする。自分で言っておきながら、彼は脳に電流を流されたかのような痺れを覚えたが。

「やつ、ああっ——ふあああああっ♥ ふあっ、あああああああっ♥」

「愛しているんだ。誰よりも強く……」

「愛——っ……はあっ……んんっ♥」

プロトサメ人間は抽送の速度を限界まで高めていく。

「……リトお……っ」

イルザの口から切なげな響きが漏れる。

「誰だって？ よく聞こえない」

「パブリトお！ パブリト様が好きなのお……♡ プロトなんてえ……どうでもいいのおっ……っ♡」

プロトサメ人間は「そうかつ……！」と満足げに唸って即時前のめりになり、イルザと激しい口付けを交わす。

「孕ませてくださいんっ……パブリト様の赤ちゃん……くださいんっ♡」

鼻までプロトサメ人間の唾液で汚したイルザは出せる限りの声で懇願した。

「……あぁっ……はぁっ……はっ、あっ——ふあああああぁんっ♡」

プロトサメ人間は狂ったように腰を突き出し、イルザに怒張を打ち込んでいく。自分でも、もう何がなんだかわからない。

でも、とにかく今はイルザ・ヴァレンシユタインという女が、自分以外の男の

精液で刻印を入れられる瞬間が見たかった。

「来るう……っ！ 大きいのが来ちゃううう……っ♥」

プロトサメ人間同様、イルザもまた限界に近づいていた。

「イルザ、全部受け止め……っ」

「あっ——」

限界に達したプロトサメ人間の雄根から、灼熱の白濁が一気に解き放たれた。

「はああああああああああああああああああ——っ♥」

ほぼ同時に、一瞬なる閃光を脳内に走らせたイルザの全身に快感が駆け回り、それは激しい痙攣となって具現化する。

「孕めイルザ……っ……孕めっ……っ！」

プロトサメ人間は痙攣に起因する、食い切るかの如し圧を受けながら少しでも多くの汚濁をイルザの中に流し込もうとした後、酷く疲れ切った様子で上半身を彼女の胸元に倒した。



「すごい良かったですん……」

「あ、あの……それは私が……でしょう？ それとも……」

左手でプロトサメ人間の頭を撫で始めたイルザに対し、諸々一段落して言わば  
止気に戻ったプロトサメ人間は素直な疑問を口にする。

「決まっていますん」

イルザは苦笑いしてから、プロトサメ人間の鼻先にキスをした。

「パブリトのフリをした、プロトがすごい良かったんですん！」



一九四五年八月十八日。

「最高ですん！」

夜——肉汁滴るステーキを頬張って、イルザは恍惚の声を漏らす。

プライベートな時間を過ごすイルザとプロトサメ人間は今、げるまんスーパーアリーナ内の白室でテーブルを挟んでいた。

クロスの上には、異形が作りし多種多様な料理が並んでいる。

「素晴らしい焼き加減ですん」

称賛の言葉を受けたサメ人間は「ありがとうございます」と素直に応じたが、まだ思考は鮮明になっていなかった。

イルザ様はあんな顔をするのか——昨晚の出来事が鮮明に蘇る。

今まで見たこともないような、蠱惑的な表情。

初めて行われた、肛門への奉仕。

そして疑似的とはいえ、自分以外の男の名を叫ぶ姿。

誇張でも何でもなくこれまでのセックスで一番興奮したし、凄まじき充実感と多幸感は今この瞬間にも少なからずプロトサメ人間の中に残っている。

やって良かったと、素直にそう思う。

「イルザ様、ありがとうございます」

「んー？」

イルザはナイフで切り分けた肉を頬張りながらプロトサメ人間を見る。

戦取られごっこ

「今回の一件で、私はどれだけイルザ様を愛しているか——それがわかりました。そして、自分がどれだけ幸せ者なのかも」

「もおん、大袈裟ですん」

イルザはワインを一口飲んでから苦笑する。

「私は今までずっとプロトに助けに来てもらいましたん。でもん、私からは何もプロトに返せていないですん。だからこんなのお安い御用ですん」

戦取られごっこ

ウインクを送ったイルザに対して、プロトサメ人間が「それで……今後のことですが……」と切り出したのはその時だ。

「もつと、この『ごっこ』を続けたいのですが……」

イルザはそう言われて、今度は頷きを返す。

「勿論構わないですん！　もっともっと、プロトにお返しさせていただきますん！」



夕食を終えた後、二人は「善は急げ！」とでも言わんばかりに外出した。

「着きましたん！」

夜は照明がある程度落とされている鮫林寺の地下都市を進む中尉は、路地裏に入って少し歩いた場所で立ち止まり、自分の斜め右上を指差した。

「ここですん」

ある程度の距離を取りつつイルザに追従していたプロトサメ人間が人差し指の先を見ると、そこには赤々しいネオンに彩られたアダルトショップの看板がある。

「いつもここで買ってたんですか……」

夜伽の際にイルザが「これを使ってくださいん！」と差し出してくる諸々が、

一体どこで調達されているのかを。プロトサメ人間は今この瞬間に理解した。

「経費で落ちますん。パブリト様には、好きなものを選んで頂きたいですん」

「そうか」

咳がしいちがい一咳してから、プロトサメ人間は声色を変えてイルザの腰を抱く。

「じゃあ、行こうか」

両目を蕩けさせて「はいん……っ♥」と答えたイルザと共にプロトサメ人間はアダルトショップの店内に足を踏み入れる。

「ふふっ……いっぱいん……♥」

黒いカーテンを潜るなり、やや暗めの空間に並ぶ『色々なもの』が目に入った。バイブレーターにデイルド。

オナホール、ローション、コンドーム、ペニスリング。

様々なコスチュームや強壯剤もコーナーに分けて置かれている。

「すっごくおっきいん……」

まずイルザは手近な場所にあった大型のバイブを手取る。太さ・大きさ共にプロトサメ人間の陰莖の約二倍はあった。

「それにするかい？」

プロトサメ人間はそうは言ってみたものの流石に大き過ぎると判断したため、苦笑いして「壊れてしまいますん」とそれをすぐ柵に戻すイルザに安堵する。

「じゃあこれでん」

そう言ってプロトサメ人間の陰器とほぼ同サイズのバイブを彼が持ったカゴに放り込んでから、イルザはスムーズな動きで首輪と口隠し、そして手錠を柵から取っていく。

「パブリト様……っ」

しばし買い物が続いた後、両手で性具を抱えたイルザはプロトサメ人間の前で頬を染めつつ太腿を擦り合わせた。

「選んでいたら……凄くエッチな気分になってきましたん……っ」

鈍い光を持つ滴が、彼女の内股で妖しく反射している――。



「はあ……う……んっ……」

重みのある紙袋を携えて白室に戻ってから約三十分後――白室内に立ち込める熱く湿った空気は、今日もイルザの甘い嬌声で微震していた。

「彼はまだ仕事中なんだろう？」

ベッドの上で一糸纏わぬ姿となっているプロトサメ人間は、同じように裸体のイルザを背後から抱き包む形で囁く。勿論、耳元で。

「ああ、あっ……言わ……ないでんっ……」

後ろ手に手錠を嵌められ、口隠し、更にいつもとは違う犬の首輪も巻いているイルザは被虐の悦びで体を震わせた。

既に乳首はいつも以上の張りを持ち、褐色肌のあちこちにも淫靡な汗の反射が見受けられる。

「彼は必死で働いているのに、愛しい彼女はこんなことをしている」

「はあっ……はあ……あ……」

プロトサメ人間が人差し指と中指による両乳首への優しい愛撫を再開すると、期待で熱い吐息を漏らしていたイルザの口から切なげな声が押し出される。

「さあ、いやらしいものを挿入れるよ……」

赤々しい緑色のコンドームを被せられたバイブの先端部分が、イルザの秘部にゆっくりと近付いていく。

「つつっ——❤️」

既に乾いている箇所が一ミリも存在していない場所の中心部に触れた先端は、愛液まみれの淫肉に快く受け入れられていく。

「はあっ……❤️ ああっ……❤️」

性具が少しずつ進む度にイルザの爪先が弾かれたように動き、踵がベッドとの間できつい角度を取った。

「全部入ったよ。彼の『モノ』とどちらがいいかい？」

だらしなく口を開け、幾筋もの涎を垂らしているイルザは右の耳元で囁かれたプロトサメ人間の問い掛けに「こっち……っ♡ こっちがいいのお……っ♡」と切羽詰まった様子で答え、続いて早く動かしてとせがんだ。

「ひうっ……♡」

前後に動かし始める

プロトサメ人間がバイブの電源を入れ彼女の望みを叶えると、白室に戻るなりシャワーも浴びずに行われた前戯でかなりの段階まで出来上がっていたイルザは、モーター音で鼓膜を叩かれながら軽い絶頂に達する。

「ほらイルザ、舌を出して」

「ふあいつ……♡」

余韻に浸る間もなく、イルザは『パブリト』の求めに応じて首を限界まで回し、

まるで犬のように大きく舌を出してプロトサメ人間と激しく絡ませ合う。

「はあっ……んぷっ……んりゅっ……」

それは、互いの唾液を少しでも相手の喉奥に押し込めるかの如し。接触点から響き渡る粘着音は高オクタンの燃料となって、両者の興奮を更に高めていく。

「ほら、綺麗にして」

頃合を見計らって口を放したプロトサメ人間は、丁寧だが決して乱暴ではない動作で腔内から抜き出したバイブの先端部を、コンドームを外した上でイルザの口元に近付ける。

「ふあ……いっ……」

視界が塞がっているため感触でバイブの位置を探し当てたイルザは口を開け、まるでフグか何かのように頬を窄めて頭を前後させる。

声にも息にも聞こえる音がプロトサメ人間の耳を打った。

「はあっ……あっ……えっ!？」

それから五分が経過した。

ベッド上に四つん這いになり、手錠も口隠しも外されて挿入の時を待っていたイルザは、突如肛門に走った冷たさに声を上げる。

「パブリト様っ……！　そこは駄目え……っ！」

「ほら、もっと尻を突き上げて」

プロトサメ人間は先程アダルトショップで買ったローションをイルザの尻肉に垂らし、若干の粘度を持つそれを全体に広げていく。

そして彼女の菊門を一度中指で上から下に優しく撫でてから、人差し指を使い、筋の一本一本に馴染ませるようにしてローションを塗り込んだ。

「……ん……あ……っ♥」

入念に指で内側にも潤滑油を馴染ませた上で、中腰になったプロトサメ人間はコンドームを嵌めた怒張をイルザの肛門に挿入する。

「あっ——ふああああああんっ♥」

イルザが大きく仰け反らせた背筋から汗を飛ばした直後、根元まで入れ終えたプロトサメ人間は一心不乱に腰を振り始めた。

「やあつ、ああん……プロトおつ♥ んっ……ふうっ……はあああああつ♥」  
瞬く間に泡立った結合部から水音が部屋中に響き渡り、ローションと汗、更に腸液の混ざり合った滴がシートに飛び散っていく。

「パブリト様……っ……どこへん？」

やがて絶頂を迎えて枕に突っ伏したイルザは、はち切れんばかりの先端部分を白一色にしている日本製コンドームを外し終えたプロトサメ人間が、いそいそとベッドから降りようとしていることに気付く。

「小使がしたくなった」

「では——」

イルザは犬のように開脚して、大きく口を開ける。

「ここをお使いくださいん」

それこそトイレの排水溝のように黒々とした喉奥をプロトサメ人間は見た。

「使ってほしいんです……」

「飛んだ変態だな。そこまで言うなら使ってやる」

「ありがとうございます……っ」

イルザは自分の前に堂々と仁王立ちしたプロトサメ人間の股間に顔を近付け、  
まだ少し固い陰茎を右手で自分の口元に持っていく。

くぐもった「どうぞ」の声と共に、プロトサメ人間は放尿を開始した――。



一九四五年八月二十日。

「すん？」

白のビキニを纏って鮫林寺内のプールを一人泳いでいたイルザは、その端まで

辿り着いて水面から顔を出した時、飛び込み台の上にプロトサメ人間の足があることに気付いた。

「温泉ですん？」

塩素臭い水滴を滴らせてプールから上がったイルザは、今は結っていない髪をタオルで拭きつつ、プロトサメ人間が手渡した書類を見る。

鮫林寺の中に、保養施設として温泉宿が建設された——紙面には、そう記してある。

「イルザ様、宜しければご一緒しませんか……？」

「ふーんっ」

予想通りの言葉を受けたイルザは横目でプロトサメ人間を一瞥した。

その口元は……緩んでいる。

「モチのロンですん！」

勢い良くタオルを投げ捨てたイルザが襲い掛かるようにしてプロトサメ人間に

抱き付いたのは、それから僅か半秒後だった。



一九四五年八月二十日。

イルザとプロトサメ人間の姿は、鮫林寺内に作られた保養施設——『枢軸旅館  
ナチス亭』の露天風呂にあった。

「最近彼とはどうだい？」

今は『パブリト』を演じているプロトサメ人間は熱い湯に半身を浸しながら、  
同所の淵際に腰掛けていているイルザに問うた。

「……別れようかと思ってますん」

膝にタオルを掛け、乳房を露出させているイルザは一拍置いてから放す。

「プロトと一緒にいると凄く疲れてしまいますん。きっと、向こうも同じように

考えていますん」

それを聞いたプロトサメ人間は心の奥に強い痛みを感じたが、すぐにイルザはアイコンタクトを彼に送る。

演技だから、大丈夫ですん——と。

そしてイルザは湯に戻ると、静かな水音を立ててプロトサメ人間に寄り添った。「でも、パブリト様と一緒にいると安心できますん」

プロトサメ人間は返答の代わりにイルザの右胸に手を伸ばし、その先端にある、いつも通り張りのある薄桃色を摘まむ。

「あっ♡」

口を細めて身を振ったイルザは、湯のモザイク越しにプロトサメ人間の陰茎がもう限界まで反り返っていることに気付いた。

「じゃあ上がってん……」

プロトサメ人間の手を引いて洗い場まで移動したイルザは、彼をバスチェアに

座らせた上で白らはその背中側に膝を下ろす。

「パブリト様の逞しい背中、綺麗にしてあげますん」

洗面器の中で大いに泡立った白々を自分の丰满な胸元や腹筋等にこれでもかと塗りたくったイルザは、背ビレ諸共プロトサメ人間の背中を抱き締める。

「んっ……」

柔らかな感触が背中に走るや否や、後ろから回された右手がプロトサメ人間の生殖根を泡だらけの五指で優しく包み込む。

「凄いつ……プロトより……ずっと固くて大きいんっ……♥」

泡を全体に塗り込めるような前後運動。

次に、人差し指の腹を使った龟头への愛撫。

「——アツ」

更に首筋やうなじへのソフトタッチなキスを受けて、プロトサメ人間は唸りを漏らさずにはいられなかった。

「今度は私が……」

亀頭から離れたイルザの人差し指がカウパーの淫靡な糸を引く様子を見た後、プロトサメ人間は攻守転換を提案、今度は彼女をバスチェアに座らせる。

「やんっ……♡」

まずプロトサメ人間は両手で下からイルザの双乳を揉みしだき、続いて親指と人差し指を組み合わせた責めを両乳首に加える。

「はあっ……パブリト様あ……っ、いい……っ♡」

続く人差し指の先端による弾きや、胸全体を掌で包んだ上で行われた親指での愛撫は、白き液体石鹸の泡をローション代わりとしてイルザの興奮を加速度的に高めていく。

「だめっ……きちやっ……♡」

内からの高まりを感じるイルザは肉感的な太腿を切なげに擦り合わせる。

付け根に近い場所の内側には、石鹸ではない真新しいぬめり液が加わっていた。

「あっ——♡」

程なくして絶頂したイルザの体が大きく震え、犬を向いて開いた口からは声にならぬ叫びが、股間からは熱い雫がそれぞれ解き放たれた。

「来てん……」

何度か大きく肩で息をしたイルザは、余韻をまだ残しつつもプロトサメ人間の手を掴む。

「早くう……っ」

湯船に戻ったイルザは、縁に手を当てて尻を出す。その中央からは蜜が滴り、重力に引かれて彼女の内股を幾筋にも渡り伝っている。

「——っ」

後を追う形で湯船に入ったプロトサメ人間はイルザの腰を右手で固定すると、付け根に左手を添えて怒張を挿入した。すぐに全体が熱い感触に包み込まれる。

「動くぞ……っ！」

「来てえん……っ♥」

静かな露天風呂に淫靡な音が響き始める。

プロトサメ人間が奥へ深く突き入れる度にイルザの双乳は激しく前後に揺れ、叩き付けられた肌同士が汗と湯を飛び散らせる。

「ああっ、はあっ……パブリトお……ああっ、ああっ……ああああっ♥」

プロトサメ人間が突きながら上体を倒して我武者羅がむしゃらにイルザの耳やこめかみを舐め始めると、彼女は「せっかくなら！」と言わんばかりに首を捻り、限界まで舌を出してキスを求めた。

「ああっ……えろっ……えおお……っ♥ やっ!? はあああああっ——♥」

口付けと呼ぶにも烏滯おこがましい行為の途中、プロトサメ人間は突如として体を再び起こし、直立状態となってより激しく腰を動かし始める。

「い——っ!」

しばし淫靡な音を響かせた後、プロトサメ人間は再び達したイルザの秘部から

怒張を引き抜き、

「え——っ？」

事態を理解できずにいるイルザの尻に向けて精を放った。

空気に直接接触れた滴から、瞬時に栗の花の臭いが立ち昇って両者の鼻孔を突く。

「パブリト様の……ものにされてますん……っ♥」

臀部を熱い白が伝っていく感触はイルザに服従の悦びを、プロトサメ人間にはこの上ない征服感と、今まで以上の背徳感を与えた——。



数時間後——『枢軸旅館ナチス亭』の客室である。

「んふ……ふあむ……んうっ……♥」

夕食というインターバルを終えたプロトサメ人間とイルザは現在、休面座位で

一つになりながら互いの舌を絡ませ合っている。

あちこち汗が滲んだ布団の周囲には乱雑に脱ぎ捨てられた浴衣やその帯の他に、栗の花臭い丸めたティッシュも早くも五個以上転がっていた。

「ふあっ……パブリト様あっ……好きいんっ……」

上気したイルザの肢体はプロトサメ人間の引き締まった肉体同様、暗い部屋の片隅に置かれたライトからの微光に照らされて陰影を刻んでいる。

「プロトより……っ……遥かにいいのおんっ……あんな情けないサメの情けない  
交 接 器  
クラスパーなんかより、パブリト様の方がいいんっ……」

「別れるか？」

プロトサメ人間は繋がったままイルザの左乳首を咥え込み、下の先端でそれを上下に舐め回す。

「ふああんっ♥ 別れますん……っ……別れるって電話しますん……っ♥」

更に加えられた吸い付きで背筋を微震させながら、イルザはプロトサメ人間の

後頭部を何度も撫でながら「あんなサメ、一人寂しくオナニーしてればいいんで  
すんっ……♡」と繋げる。

「そうだな。俺に寝取られていることも知らないで、アイツは一人未練がましく  
扱いていればいい」

陰茎を一度抜いたプロトサメ人間は、仰向けにしたイルザの足を左右に広げる。  
「奴はここを、もう二度と舐めることもできない」

次に四つん這いになったプロトサメ人間は、イルザの愛液だけではなく自分の  
精液も滴る場所に口を付け、わざと音を立てて吸い始める。

「ふあっ……汚いですんっ……」

イルザは背筋に高まりを覚えつつも制止しなかったばかりか、自分の体内から  
卑猥な音を立てて吸い出された混合液をプロトサメ人間に口移しされても喜んで  
受け取った。

「パブリト様あん……♡ また……欲しくなりましたん……っ♡」

淫のカクテルを心底嬉しそうに嘸えんげ下したイルザは、枕に後頭部を乗せた上で、今日何度もプロトサメ人間の精を受け止めた自分の秘部を左右に押し広げた。

「パブリト様専用の『ここ』に……っ♥」

「プロトにさよならも済ませていないのに、もう俺のものだと思っっているのか？」  
そう荒っぽく言い放ったプロトサメ人間はイルザに覆い被さると、潤む彼女の双眸を口で射抜きながら自身を挿入していく。

「はあっ——っっっああああああああああああっ♥」

熱い感触——蠢く肉壁が引き千切らんばかりに吸い付いてくる。油断したら、今にも射精してしまいそうだった。

「ああっ♥ はあっ……あっ……っ♥」

プロトサメ人間が腰を動かし始めるなり、連動して双乳を上下させるイルザは大声で喘ぎつつ枕を後ろ手に掴む。

「そんなにプロトじゃ……満足できなかったのか……？」



イルザが頂に達して一際大きな声を上げた刹那、プロトサメ人間は食い縛っていた歯を解放し、己の欲望の全てを彼女の中に解き放つ。

「あっ……」

視界を真っ白に変えたプロトサメ人間の熱い汚濁はこうして、彼の亀頭先端とその口を密着させている子宮内に注ぎ込まれた。



「あの……」

それから何度も何度も体位を入れ替えて交わった後、全て出し尽くした様子プロトサメ人間は布団に横たわりながら切り出した。

「どうしましたん？ パブリト様」

胸板に手を乗せて添い寝するイルザは甘い響きを漏らすか、

「あつ……元に戻してもらえると嬉しいです……」

プロトサメ人間は懇懇な口調でそう訴える。

「この『ごっこ』はしばらく控えましょう」

イルザが「はいん」と快諾してから、プロトサメ人間は自分が後戻りできなくなりそうで怖い旨を素直に告白する。

このまま続けたら、本当に更なる先へ——それこそ、本当にイルザを他の男に抱かせないと満足できないような——行ってしまおうのではないかと。

「プロトは心配性ですん」

ふふつと一笑いしてから、イルザはもう少しだけ距離を詰める。

他の男と較る

「そんなことは言い出さないと思っているから、私はこの『ごっこ』に付き合い  
ましたん。もしかしてプロトは、私がそんな女だと思っていましたん？」

「い、いえそんなことは……」

「なら結構ですん」

慌てて否定したプロトサメ人間のすぐ近くで、イルザは嬉しそうに微笑む。

「じゃあ今からは、久しぶりにいつもの姿で一つになりましょうん」

そして彼女はプロトサメ人間に覆い被さると、有無を言わさず彼の唇を奪った。

終